

[002] 語文研究表紙奥付等

<http://hdl.handle.net/2324/10265>

出版情報：語文研究. 2, 1955-05-10. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：



学会 彙 報

行 事

昭和二十六年 度

○新入会員歓迎会（昭和二十六年五月十二日）於法文第一演習室。

○総 会（五月二十日）於三長閣。

○研究発表題目及び発表者

伊勢物語燈について 目加田さくを

我が妻はいたく古比らし 東 秀 吉

―万葉集に於けるラシの接続―

上代接頭語の表現形態とその本質 瀬良 益夫

遁世者の自然観について 井手 恒雄

詞・辞の過程的構造形式図について 黒岩 駒男

文学表現に於ける幻影と象徴 藤井 毅

文学史の可能性について 笹淵 友一

蕨玖波集の自然 瀬古 確

²³⁴ 焼津辺―ヤキツベニカヲカ― 穴山 孝道

○例会（十一月二十五日）於法文第一演

習室。

研究発表題目及び発表者

上代歌謡における助詞「や」と「か」

（卒論）

兼好の文芸の反封建性について

野田 幸助 井手 恒雄

合作浄瑠璃の作者文耕堂を中心として

横山 正 杉浦正一郎

俳諧研究の現状と将来 杉浦正一郎

古代日本語における言語基層の問題 福田 良輔

○笹淵先生歓迎座談会（昭和二十七年一月十四日）於法文五番教室

○卒業論文発表会（二月三日）於三長閣

近代リアリズムの変質について

林 敬之助 田村 克郎

純粋小説論 木原 民也

宮本百合子論 野上 一男

徳田秋声論 工藤 正介

萩原朔太郎論 雨宮 崇

嘉村磯多論 日田 初夫

日田蕉門の研究 大内 初夫

―蕉風地方滲透の一考察として―

竹取物語の背景 村田 正志

―説話の推移過程を主題として―

なほ引続いて同所に於いて予餞会が催された。

昭和二十七年 度

○新入会員歓迎会（四月二十一日）於法文第一演習室。

○総 会（五月十一日）於法文第七演習室

○研究発表題目及び発表者

明治文学とニーチェ 重松 泰雄

抒情物としての万葉植物 永井 寛

源氏物語構想論の構想 目加田さくを

東国語の否定表現 東 秀吉

―辞による―

操り漸衰期の浄瑠璃作者 横山 正

文学評論に於ける封建性について 井手 恒雄

真福寺太霊異記の性格 平井 秀文

○笹淵先生歓迎茶話会（九月十八日）於三長閣。

○例会（十一月二十三日）於法文第七演

習室。

○研究発表題目及び発表者

俳人野坡の九州行脚について 大内 初夫

古代形容詞の語尾「ケ」について 麻生 朝道

浪華日記の作者 清田 正喜
—宝曆末期の一戯作者—

少将滋幹の母論 目加田さくを

徒然草の一解釈 井手 恒雄

万葉より古今への道 白木 喬

講演 文学における「観念」の問題

笹淵友一講師

なほ同日夜、笹淵先生歓迎懇親会が九大

職員寮に於いて行はれた。

○卒業論文発表会（昭和二十八年二月一日）於法文第七演習室。

長塚節の「写生」について

坂本 一美

西行をめぐる三つの考察 木下 毅

西鶴の非感傷性と云はれるもの

—特に後期の作品について—

芦塚 民歌

宮沢賢治論

—「象徴」への表現について—

境 忠一

明治新体詩論の展開 武田 昭雄

近松作品の語彙的研究 棚町 知弥

—「心中天の網島」を中心に—

用字法より見たる万葉集仮字書の巻

鶴 久

上代助詞「を」について 佐々木義昭

芭蕉・蕪村 我有 武夫
—座五に関する一考察—

副詞の陳述性について 佐田 智明

北条民雄研究 坂本 妙子

純粹小説論 田村 克郎

なほ引続いて予餞会が三畏閣に於いて行

はれた。

昭和二十八年年度

○新入会員歓迎遠足会（五月十七日）今宿

行き。

○總會（五月三十一日）於法文第七演習

室。

研究発表題目及び発表者

「旅寝論」と「去来抄」 大内 初夫

「伸子」の抵抗 春山 要子

荷風の戯作者性について 立川昭二郎

人麻呂をめぐる 山田 輝彦

「渡津海の豊旗雲に」の歌について

永井 寛

源氏物語に於ける古物語性の問題

—宇治十帖について— 目加田さくを

国語の二三について 井浦 安喜

引き続き同日夜、三畏閣に於いて懇親会

が催された。

○例会（六月二十七日）於法文第七演習

室。

研究発表題目及び発表者

和泉式部について 藤崎 英子

「もの」考 徳満 澄雄

荷風文学の二重性について

立川昭二郎

○小島先生歓迎座談会（九月二十六日）於

法文第六演習室。

○例会（十一月十九日）於法文第七演習

室。

研究発表題目及び発表者

去来展に於ける新資料の二・三について

大内 初夫

憶良の思想をめぐる 柴田 守

序詞に於ける人麻呂の特色

岡本 庸子

○卒業論文発表会（昭和二十九年二月七

日）於三畏閣。

山上憶良研究 柴田 守

大伴家持研究 藤井 茂利

人麻呂長歌の修辞研究 岡本 庸子

告白文学としての蜻蛉日記

田崎 正大

源氏物語に於ける主題の展開

和泉式部の研究

徳満 澄雄
藤崎 英子

中世文学の一側面

佐々木雄爾

芭蕉と自然

森山 隆

西鶴町人物の社会的背景

松野 寿生

なほ引続き同所で卒業生予餞会が行はれた。

昭和二十九年

○新入会員歓迎遠足会(五月二十五日) 志賀島行き。大学院修士課程二人、学部十

四人の新入生を迎へたが、西鉄ストと雨模様、天気は災されて、福田・杉浦両先生を合せて十人に満たない参加者であつた。

○総会(五月二日) 於法文一番教室。

研究発表題目及び発表者

「見るからに」考 東 秀吉
打消の助動詞の系譜 矢野 文博
「ヤン」について
兼好法師家集に見える兼好

大内 騷 耶子
白木 喬
藤井 毅

荷田多満の万葉集研究

日本永代蔵考

七五調の成立に就いて 瀬古 確
蜻蛉日記の一節について 橋本元二郎

なほ同日夜、市内「魚よし」に春日政治先生

の喜寿記念祝賀の宴が催され、春日先生

御夫妻、令息和男先生を御賓客とし、大阪

の小島吉雄先生、九大国語国文の諸先生、

東京の笹淵先輩をはじめ、先生に教へをい

ただいた諸先輩や先生の学徳を慕ふ卒業生

が福岡はもとより近畿・中国・九州の各地

から出席し、和やかな賀宴が催された。

○小島先生歓迎座談会(五月十二日) 於三畏閣。

福田・杉浦両先生の外、中国文学の目

加田教授も出席され、活気旺盛した座談

会であつた。

○例会(六月二十六日) 於法文第七演習室。

研究発表題目及び発表者
井堤越す浪の音のさやけさ 鶴 久
貞門談林時代の九州俳壇 大内 初夫
林美美子の「放浪記」について 立川昭二郎

○関西方面研究旅行(十月十九日) 同月二十三日

春日和男先生引率のもとに、鶴助手外大学院・学部学生十四名は、関西方面に万葉古蹟歴訪を中心とした四泊五日の研究旅行を

行つた。沢瀉久孝博士・大阪大学の小島吉

雄・犬養孝両先生、八木毅先輩に、御多用

中にも係はらず、案内や宿泊等何かと御親

切に御世話していただいたことは感謝に堪

へない。

○新入会員歓迎遠足会(十一月十四日) 深江行き。

教養部よりの進学生十四名を迎へ、福

田・杉浦・春日の諸先生をはじめ在学生の

大部分が出席し、休憩所で懇親会が催され

た。

○例会(十二月四日) 於一番教室

研究発表題目及び発表者

輝く日の宮の巻について 徳満 澄雄
あゆみ抄に於ける「かへしざま」につ 佐田 智明
いて
源氏物語に於ける助動詞「めり」につ 伊藤 伊勢男
いて

○卒業論文発表会(昭和三十年一月三十日) 於法文第七演習室。

学 部
宮沢賢治研究 野口 親光
―法華経とその生涯―
竹取物語管見 高山 定基
清少納言枕草子の特質の所在
―をかし文学としての枕草子― 高木 宏

伊勢物語と貫之 末永喜美枝

大学院

あゆみ抄の研究 佐田 智明

―主として文法思想と
その成立過程について―

引続き三畏閣で卒業予餞会が催され、学

部の福田・杉浦・春日及び教養部の田村・重

松の諸先生をはじめ、福岡近在の諸先輩、在

学生の大部分が出席し、和やかな中にも、

大学生の予餞会に相応しい活気を呈した会

であつた。

本年度講義題目

第一期(自昭和二十九年四月至同年

十月)

国語史 福田 教授

演習 江戸時代古典学者の語法研究(大

学院のみ) //

演習 万葉集卷五 //

平安朝音韻の諸問題 春日(和助教授

国文体発達史 春日(政講師

日本近世文学史(芭蕉の作品) 杉浦 教授

演習 芭蕉の連句 //

演習 西鶴の小説 //

演習 枕草子 (分校) 田村 教授

特講 日本文学に於ける仏教思想 (分校) 穴山助教授

第二期(自昭和二十九年十一月至同

三十年三月)

国語史 福田 教授

演習 万葉集卷五 //

平安朝音韻の諸問題(其の二) 春日(和助教授

演習 土佐日記 //

国文体発達史 春日(政講師

日本近世文学史(芭蕉の作品) 杉浦 教授

演習 芭蕉の連句 //

演習 西鶴の小説 //

講読 堤中納言物語 春日(和助教授

演習 枕草子 (分校) 田村 教授

特講 日本文学に於ける仏教思想 (分校) 穴山助教授

江戸時代の古典学者の語法研究(大学院

のみ) 福田 教授

特研 あゆみ抄(大学院のみ) 福田 教授

特研 芭蕉書簡の研究(大学院のみ) 杉浦 教授

異動・消息

○杉浦正一郎先生は昭和二十八年八月十六

日付を以て本学教授になられました。

○春日和男先生は昭和二十九年七月一日付

を以て教養部助教授より文学部助教授に配

置転換にられました。

○重松泰雄氏は昭和二十九年七月十五日付

を以て、本学教養部第二分校講師になられ

ました。

○鶴久氏は昭和二十八年五月十日付を以て

本学助手に就任されました。

○名譽会長春日政治先生は昭和二十九年四

月一日を以て喜寿の齢を迎へられました。

心からお慶び申し上げます。

○笹月清美氏は昭和二十九年二月四日逝去

されたので、福田先生が本会を代表して葬

儀に参列されました。深く哀悼の意を表

します。

○高木正蔵氏は昭和二十九年六月三日逝去

されたので福田先生が本会を代表して葬儀

に参列されました。深く哀悼の意を表し

ます。

○春日政治先生から、この度「語文研究」

の基金として金一万円を御寄贈いただきま

した。會員諸氏に報告するとともに、先生

に厚く御礼申し上げます。(以上)